

# 第17回樫山純三賞

## 第17回樫山純三賞 <学術書賞>受賞作

なかむら ゆか  
中村 友香氏の紹介

筑波大学人文社会系助教



2014年 津田塾大学学芸学部 卒業  
2020年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
博士課程(五年一貫制)修了 博士(地域研究)取得  
2020年~2022年 日本学術振興会特別研究員(PD)  
2022年 筑波大学人文社会系助教

### 『病いの会話』

ネパールで糖尿病を共に生きる』

中村 友香 著

京都大学学術出版会 刊

## 第17回樫山純三賞 <一般書賞>受賞作

くまくら じゅん  
熊倉 潤氏の紹介

法政大学法学部国際政治学科准教授



1986年 生まれ  
2009年 東京大学文学部(東洋史)卒業  
2016年 東京大学大学院法学政治学研究科  
博士課程修了(法学博士)  
2016~18年 日本学術振興会海外特別研究員  
国立政治大学(台湾)客座助研究員  
2018~21年 アジア経済研究所研究員  
2021年 法政大学法学部国際政治学科准教授

### 『新疆ウイグル自治区』

中国共産党支配の70年』

熊倉 潤 著

中央公論新社 刊

## 第17回樫山純三賞の審査について

選考委員代表 若林 正文

第17回樫山純三賞は、2021年4月から2022年6月までに日本で刊行されたアジア関連図書を対象としていますが、今回も自薦・他薦によって、学術書として16冊、一般書として18冊、両部門共通として8冊、計42冊の応募がありました。昨今、米中関係緊張の拡大やCOVID-19パンデミックの終息が依然見通せない中で、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、世界の秩序が目の前で塗り替えられていくような不吉な感覚が社会を被いつつあるかに見受けられます。そんな中で、今年もこれまでと変わることなく、多様な世代と背景を持つ研究者・書き手のアジア研究図書の応募があったことを、たいへん心強く感じました。

選考委員会では、7月の第一次選考で選考対象著作を15点に絞り込み、以後選考委員が分担して候補作を読み、8月31日の最終選考で4時間近い慎重審議を経て、結果、学術書は中村友香『病いの会話 ネパールで糖尿病を生きる』（京都大学学術出版会）を、一般書は熊倉潤『新疆ウイグル自治区—中国共産党支配の70年』（中公新書）を、今回の受賞作と決定しました。

多くの力作、優秀作の中からこの2作が選ばれた所以は、それぞれの選評に過不足なく示されていますが、いずれも新進気鋭の研究者の、豊かな内容を丁寧に読者に伝える姿勢に溢れた著作です。それ故に読者は、作品そのものの内容のさらにその一歩先を考えることに誘惑されるかもしれません。

中村著は、ネパールでの二型糖尿病患者と、その周囲の人々（医師・看護師を含む）との間の「病いの会話」を一般読者にもわかりやすい丁寧な手順で現前させ、さらにそれが、病いの不確かさを生きること（それは長い、苦しみの繰り返しであるはずのもの）を可能にする「共に生きる」関係性を作る実践であることを、これも実に丁寧な論の運びで読者を説得しています。生物医療（近代医療）が行き届き、ために病多き「老後」が格段に長くなり、人の生の不確かさが別の形で前景化して久しい日本の社会においても、決して他人事でない生のあり方を示唆しているものと感銘を受けました。

熊倉著は、中国共産党の新疆ウイグル自治区統治の70年の流れを、統治政策の変遷と本土政治の動乱の辺境への波動とを軸に論述しています。その淡々としてしかも丁寧な論述は、漢族統治エリートにおける国境地域安全保障の懸念と「国民形成」(nation-building)の強迫観念とが交錯する統治政策が、現今のウイグル民族にとっての一種のディストピア的極限をもたらしていることを説得的に示しています。本書からは、中華帝国の伝統的な「実辺」(辺境を「民」=漢人農耕民で満たす)政策と帝国大の「民族」を作ろうとする一大ナショナリズム工程とが結合した異形の姿が浮かびあがってくるように感じます。

なお、以上2作の他、最後まで受賞を争った力作には、学術書では巖 善平『ミクロデータからみる現代中国の社会と経済』（勁草書房）、一般書では佐橋亮『米中対立 アメリカの戦略転換と分断される世界』（中央公論新社）および高橋伸夫『中国共産党の歴史』（慶應義塾大学出版会）などがあったことを指摘しておきます。

最後に、今回応募いただいた皆様をはじめ、多数のアジア研究の良書を執筆・刊行していただいている著者・研究者や出版社の皆様にご敬意と感謝を表するとともに、来年度も引き続き良書のご推薦をよろしくお願いいたします。